

サテイーをめぐる語りの重層性

田 中 鉄 也

本発表は、欧米を中心に展開されてきたサテイー研究への近年の批判を乗り越え、新たな学術的方向性を見出すための一試論である。インド・ラージャスターン州に位置するラーニー・サテイー寺院 (*Sri Rajni Sati Mandir*) とそれを管理する一 (父系) 出自集団アグラワール (*Agarwal*) による寺院運営史をケース・スタディとして取り上げ、同寺院の運営史から見られる「ラーニー・サテイーをめぐる様々な語り」への精査を通じて、運営者であるアグラワールの「生」や「記憶」がいかに構成されてきたのか、また彼らがいかに自らを再構成してきたのか、その過程・変遷の解明を試みる。本発表では以上の研究目的の前提となる理論的枠組みを紹介する。

サテイー (*sati*) とはヒンドゥー教徒の寡婦殉死で知られ、夫が死に至った時、その妻は夫の遺体と共に生きたまま荼毘に付される。妻は焚死することで夫と共に天界へ昇ると考えられ、時に彼女は家族の守護神とみなされる。一九八七年、ラージャスターン州で起きた新妻ループ・カンワル (当時一八才) の「サテイー事件」と、その事件を契機に発生したデモ活動及び知識人の論戦によって、フェミニズムを中心にサテイーに関する研究 (以下、サテイー研究) が急速に進展した。一九八八年「サテイー (防止) 委員会法」の施行により、サテイーは厳

罰をもって禁止され、焚死した女性のための寺院建立や崇拝行為も同時に禁止された。同法によってラーニー・サテイー寺院への規制・批判が厳しくなると同時に、当該寺院への学術的関心も高まっている。

近年のサテイー研究において、研究者の価値観・立場が分析の前提において顕著に現われている点は否定できない。サテイー研究に従事する者は、近代的倫理観に反する暴力的儀礼をなぜ分析しなければならないのか、そしてどのように分析すべきかという疑問に常に苛まれる。その根本的な疑問はしばしば最終的に自身の学術的解釈にまで影響を及ぼし、自らの価値観・立場を表明するかのような研究が多くみられる。これは研究者の表象行為の持つ権力性を憂慮せざるを得ない大きな問題であろう。

以上の問題乗り越えるため、発表者はサバルタン研究グループの歴史学的方法論に注目する。特にその一人、S・アミンによるサバルタン (従属的状况におかれた人々) の歴史記述は、本研究の重要なモデルになりえる。彼は、農民反乱の一例における、サバルタン (そこでは農民) の主体性への追及に没入することなく、支配者/被支配者を問わず、事件をめぐる様々な要素によって断片化されてきた「語り」や「記憶」を重なり合わせ、事件の重層的・多元的な言説を明らかにしている。Shahid Amin, *Event, Metaphor, Memory: Chauri Chaura 1922-1992* (Berkeley: University of California Press, 1995). アミンの方法論に従い、ラーニー・サテイーをめぐる「語り (言説)」がいかに錯綜し、多様であるかが注目されよう。

第11 部会

その錯綜性・多様性は同寺院の運営史に立ち現れる。例えば、当該出自集団の語り、寺院の教義や儀礼そしてその出版物に留まらず、州政府と寺院との裁判記録やその新聞報道、及び寺院の反対団体や擁護団体なども挙げられる。当然、研究者のサテイー解釈もその重層的な「語り」の一部とみなされるべきだろう。それらを丁寧に取り上げ、いかに相互に絡み合っているのか明らかにすることが求められる。研究者のサテイーへの価値判断や自らの解釈を押しつけることなく、ラーニー・サテイー（に関わる人々）をめぐる言説の重層性を検討することは、通常アグラワールの「生」や「記憶」として一括りに定義される危険性を避けつつ、断片化された諸言説を丁寧に咀嚼するためには、有効な手段と言えるのではないだろうか。

インド民衆神話における救済

——カルキ・プラーナを事例として——

渡 邊 た ま き

本発表では、ヒンドゥ教の民衆的終末神話である『カルキ・プラーナ』を題材にして、そこにあらわれる「救済」の諸相をみることによって、「救済」神話における特徴を考察した。

黙示録においてイエスが軍団を率いて悪魔を滅ぼし、王国を建てるとあるように、カルキ・プラーナにおいても救済は、強い王によってもたらされる。人々を脅かす悪の軍勢として描か

れているのは、カリ・ユガの化身であるカリ王の他に、仏教徒たちの国や、蛮族などである。カリ・ユガに入り、法や秩序、ヴェーダの神々が重んじられなくなっていくなかで、「暗黒の」勢力が力を増し、正しい教えを守るバラモンたちは追放されていく様子が描かれる。こうした物語と叙事詩との違いは、カルキが世界を新しく創りなおして人々を救うとされている点である。原初の神話にあって、インドラが竜を退治して世界を成り立たしめたように、この世界を新しく始めさせるという仕事こそがカルキの救済だといえる。神話的意味でいえば、聖なるものが顕れるということ自体が救済なのであるが、その意味で、カルキがこの世にあらわれたということ自体で、救済は完了しているといえる。コスモゴニーによる救済は、カルキ・プラーナにおける救済の本質的要素である。

一方、七世紀に南インドから発生し、十五世紀には北インドに広がったバクティといわれる宗教運動において、伝統的なヴェーダの宗教とは異なった救済の思想が展開された。バクティは、民衆に広まっていた宗教文学の中に広くみられる宗教的態度であり、カルキ・プラーナにみられる救済を論ずる上で、バクティの考察を欠かすことはできない。カルキは敬虔なヴィシュヌのバクタであるヴィシュヌ・ヤシャのもとに生まれるとされ、ヴィシュヌ派のバクティの影響にあることが示される。カルキの説くバクティの理想は、カーストやダルマの優位性が否定されるものではないが、カリ・ユガにあってそうした理想が失われた時代だからこそ、ヴィシュヌの化身が要請されたことが伺える。一般に救済とは原罪のように聖なるものとの断絶を